
グレムスリンガー

Mr . X

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グレムスリンガー

【Nコード】

N9030B

【作者名】

Mr.X

【あらすじ】

法と正義を司るジャスティン神に仕えながら、賄賂、詐欺、裏切り、先制攻撃もいとわない自称「ムテキング」なラーズは、今日もデコボココンビたちと様々なトラブルを引き起こしつつ駆け抜ける。テンポのいい会話と、スリリングな戦闘、どんでん返しに次ぐどんでん返しに乞うご期待！

THE WARS OF ROSES

プロローグ

国立ウフィツヴィレフ図書館。

サロマ半島唯一の永世中立国であるベルーサ共和国において、最大規模を誇る国立図書館だ。

ここには半島において繰り広げられた戦争に関する貴重な資料が多数保管されており、世界でももっとも進んでいる国際法を編纂したマティアス教授の原書も保管されている。

私はこの図書館の司書を務めて早3年になるが、このすばらしい図書館の管理を任されて大い満足している。誇りを抱くほどだ。

さて、今日は当直ということで、薄暗い館内をカンランを片手に巡回している。元々宮殿として使われていたこの建物は、歩けばちょっとした散歩が出来るほどに広大だ。最近、貴重な書物を盗もうと考える不貞の輩がいるそうだが、まったく「水と安全はただで買える」と謳われるベルーサも荒んだものだ。私は注意深く辺りを見回す。

その時、こつりと音がした。

まさか！？ 私は身を硬くした。

しばらく息を潜めて意識を集中させる。一分が経過し、何事もなかったかのように大きなイビキが。

私はほつと胸をなでおろす。どうやらまだ退館していない利用者がいるらしい。しかしおかしいものだ、必ず閉館の際はチェックをいれているのに。

果たしてテーブルに突っ伏した人物がいた。髪はざんばらで長く、お世辞にも清潔感に欠いていた。身に付けているローブから推測するに、学者やその類であろうか？

露出部分は少ないが、肌は浅黒く柔らかか、長い髪から覗く耳はやや

とがっていた。

私はなるべく相手を刺激しないように注意喚起してみる。

「お客様、既に閉館時間を過ぎております。出来るだけ速やかに退館して欲しいのですが」

「……」

反応なし。

相変わらず豪快にいびきをかいている。

「お客様」

とりあえず軽く肩を小突いてみる。

やはり反応はない。

おのれ、これは少々手荒に起こしてみるしかあるまい。

「お客様、起きてください」

激しく肩をゆすつてみる。

「聞こえている」

不機嫌な声。

なんだ、どこから寝たフリをしていたのだ、このふてぶてしい利用者は？

「繰り返しますが、当館の利用時間は……」

「知るか。私は寝るぞ」

かちん。

何だこの男は！？

私は怒りに任せて肩を机から無理やり引き剥がそうとする。

そして真正面から相手の顔を睨みつけ

（女？）

初めて相手が女性だと知り拍子抜けする。

みずばらしい姿にすっかり騙されていたが、顔立ちは端整で美人と形容して間違いない。切れ長の瞳は爛々と紫色に輝いている。

（もしかしてエルフっていう奴か？）

私はベルーサでもめつたにお目にかかれない種族の名前を連想した。彼らは自然を崇拜しており、高度な生態学を体現して自給自足の生

活を送っている。ゆえに魔導文明、拝金主義によって繁栄する人間界にかかわることを極力避けていると聞くのだが――

「貴様、我が眠りを妨げようというのか!？」

今度は逆ギレする女。話がややこしくなってきたぞ……

「ええ、そうです。即刻退去していただきたい。もし命令に従えないなら警察を呼びつけますよ!」

「ふん、公権力に頼らないと何も出来ないのか。この臆病風情が」

「臆病者で結構。後悔しても遅いですからね!」

私は仕方なく懷から携帯電話を取り出した。

これこそ人間が他の種族より圧倒的優位に立つ秘密兵器。魔導器^{マギ}である。

マギとはこの地球^{テラ}に流れる龍脈^{レイライン}からのエネルギーを利用し、蒸気機関のような動力として利用する装置の総称だ。最初は魔導灯をともすのがやっとだった非力な技術も、気付けばドラグーン（自走式装置）や魔導砲など、蒸気機関や火薬の威力を上回るパワーを引き出すにいたっている。

マギの歴史は決して古くない。しかしその進化スピードと浸透力は圧倒的で、ついに移動モバイルまで作り出し、金さえあれば国民の大半がその恩恵を享受できる。

見ている、野蛮なエルフの小娘め。ちょっとばかり可愛いからって調子に乗るな! 文明の利器でぎゃふんと言わせてやる……

「後悔? それはどうか」

「なっ!？」

女の不吉な言葉に私は戸惑いディスプレイを見つめる。受信状況は圏外になっていた。

くそっ、ここはマナの密度に問題はないはずだぞ?

わたしは当直室に戻ろうと踵を返す。

しかしその行く手を女がさえぎった。

「おい、私の幸せな時を奪ってただで済むと思うのか?」

「ふざけるな! マナーも守れん奴に幸福を追求する権利があるか

！　そこをどけ！」

「ほほう、威勢だけは認めてやるぞ、ファッキン司書」

女はぱつと右手を前に差し出した。

「死ね」

「はあ！？」

おいおい冗談だろ！？

なんで、眠りを妨げただけで私が死ななければならない！？　そもそもこいつ、青い血の人間しか操れないと聞く「魔法」を使うようなそぶりすら見せているじゃないか！　そういえばエルフには精霊^{シャーマンマジック}魔術^{マジック}って奴があつたつけ！？

「ま、待て、お前、本当に……」

私の抗論はそこまでだった。

女の手から凄まじい閃光がほどばしたかと思うと、私の内臓を貫きながら後ろの書庫もろとも吹き飛ばした。あまりの破壊力に壁ごと外部へ持つていく。

「がつ……」

不思議なものだ。死の直前は走馬灯のように過去の思い出が巡るめくというが、恐ろしいまでに客観的に「死んだ」と分析する自分が滑稽であつた。

そして意識が白い霧に覆われ、暗い闇に落ちる……

1

「で、本題に入りたいんだけど」

警邏ライアンはうんざりとした表情で調書を鉛筆で叩く。

ここは法と正義を司るジャスティン神殿の取調室。陰気な石造りの小部屋に、心もとない魔導灯がまたたいていた。

「昨日午後9時ごろ、ウフィツヴィレフ図書館において、司書員アントニオ・カルノ（25）を強打して失神させた……間違いはないかな？」

これで何度目の質問だ？ ライアンはさしたる希望を持たずに女エルフの表情を見る。

これは駆け引きだ。相手の僅かな兆候を見逃すな！

ワグナー教官の訓示を頭の片隅で反芻させる。しかし……

「逆にお前の頭の配線に間違いはないな？ 奴はこういったはずだ

——図書館は吹き飛ばし、自分は死んだと。はっ！ あんなにピンピンしてるのに内臓をえぐられたとかリアルに話してるのだぞ？

そんな心神耗弱状態のイカレたキチガイの発言を真に受けるのか、国家の犬が」

先程からずっとこの調子なのである。

押さば押し、引いても押してくる。色々な犯罪者を見てきたライアンだが、この確信犯をどうやってねじ伏せるか四苦八苦していた。

「あのなあ、名誉毀損罪と公務執行妨害で貴様を別件逮捕してもいいんだぞ？」

ライアンは苛立ちを隠さずに凄んでみせた。しかし、

「それは脅迫という奴か？ 罪の捏造は重罪だと聞くぞ、青二才」この女エルフ、妙に頭がいい。しかも腹が立つほど憎たらしい。

「黙秘する。貴様では話にならん。それとエルフの弁護士を用意しろ。人間どもの法律とやらがエルフに適用できるか、あいにく分かりかねるのだな」

「ああ、そうかい！ ただお前は勘違いしてるな。ここベルーサ共和国は人種による差別はしないのだ。法律も全て人間と共通。つまり人間の弁護士を手配しても特に問題はないわけだ」

どうだとライアンは鼻を鳴らしたが、女エルフはうざったそうトントンと机を指で叩く。

「全く法律の執行者が聞いて呆れるな。弁護士を選ぶ権利も知らんのか。言つのも腹立たしいが、もう一度その腐った脳みそに刷り込んでやろう。エルフの弁護士を用意しろ、このクサレファツキンハゲ！」

「なっ」

ライアンはあまりの怒りに頭が真っ白になった。
ああいいだろう！ この場で口も利けない身体にしてやる！

ついでに女の尊厳も辱めてやろうか！？

ライアンが握りこぶしをふてぶてしくも美しい頬に叩き込もうとした時、

「おいおい、熱くなるな下僕2号」

場違いな陽気な声が降りかかる。

ライアンの表情が怒りからしらけつつ表情が変わった。

さらに腹立たしい奴がやってきやがった……

そこには燃えるような赤髪を立てた美青年が立っていた。年のころは20台半ばといったところか。

「ラーズ……」

口にするのも苦々しいとライアンは顔をそらす。

名前の頭文字が同じなのも気に食わない。

「なんだ、まだゲロするのに手間取ってるのか？」

「黙れ、お前はハイプリーストの試験でこの時間帯はいないはずだぞ。例によってすっぱかしたのか？」

そう、この男は認めたくないが自分の上司であった。学歴は自分のほうに分があるはずなのだが、難事件を解決したとかで、同期のはずのラーズは部内のハイプリースト受験資格を持っていた。階級的には警邏の上である警邏長である。

「はあ？ 下衆な考えはよしたまえ。これだから下僕は低脳で困る」
「なにを！？」

「だから熱くなるなつて。試験は最初の30分でケリを付けた。この天才にかかればこんなものだ。うわはははっ！」

馬鹿な、試験時間は2時間30分はかかる問題量のはず。おそらくマークシートを問題も見ずに塗りつぶしただけだろう……だが、

（適当でも当たりそうだから怖い）

そう、この男の強運というか悪運は凄い。これがなければとくに10回は死んでいるはずだ。いや、その前に100回はクビを切ら

れているだろう。

全く神様は不公平なものである。こんなにも真面目な人間を無視して、悪徳の限りを尽くす生臭警官に鼻屑するとは……

（チキシヨウ……ジャスティン神なんて信じるか！）

かなりバチ当たりな考えが過ぎる。

「さあ、役立たずはさつさと席をはずす。ほれほれ」

ラーズはハエでも払うようにライアンにひらひらと手を振った。

「うるさい！ 取調べの邪魔をする気か！？ そんな横暴……」

「ワグナー警部補佐より許可をもらってるんだ。どけ、ガキ。これからは大人の時間だぜ」

ラーズはびしつとライアンの目と鼻の先に委任状を突きつける。

デカ長がラーズに委任状！？

キナ臭くはあったが、命令に背くことは出来ない。

「ちつ」

ライアンはすぐごと取調室を後にするしかなかった。

フン、鼻持ちならない黒髪のアツキンシットが去ったかと思えば、入れ替わりでアツキンマツチ棒が入ってきやがった。

つたく、小うるさい司書の脳波をちよいと乱して死の幻影を見せただけなのに、ここまで大事になるとは……

私はいい加減に飽き飽きして大あくびを掻いた。

「またデコスケか。で、今度はどんな子守唄を聞かせるつもりだ？」

「子守唄？ はは、ん、相当絞られたみたいだな。だが俺は奴とは違うぞ」

「国家の犬は犬だ。何が違う？」

「何せ俺は紳士だからな」

（ぷっ）

私は思わず吹き出した。

これは傑作だ。サイコなほどに勘違いしてるぞ、この男。

「ほう、それで私を舞踏会にでも誘うつもりか？ 下心が見え見え

だぞ、でばガメ」

「否定はしないぜ。下心を除きな」

「じゃあ、さつさところから出せ」

「いいだろう」

ラーズはあっさり頷く。

おかしい。

私は警戒心をあらわにした。危険な匂いがする、この男……

「いくら出す？」

ラーズは明日の天気予報でもそらんじるように言った。

だから私も一瞬耳を疑った。

「……話が見えないが」

「何度も言わせるな。黄金色の菓子はいくら用意できるかと聞いている」

ほほう、そう来たか。むしろ分かりやすい商談で助かる。

「1万でどうだ」

「そんなもんじゃ保釈金の足しにもならんぞ。お前の罪は最低でも禁固3年に相当するんだからな」

「フェアではない。まだ刑事裁判や民事裁判も起こしていないのに、刑を前提に話を進めるな」

「じゃあ、懲役5年にしてもいいんだぜ。このベルーサに住むエルフなんて総人口の1パーセントにも満たない。つまり、マイノリティに陪臣員は厳しい裁定を下しやすいということだ」

「うす汚ねえマザーファッサーめ」

「お互い様だ。さあ、どうする？」

「5万」

「甘い10万だ」

「では10万」

「なんだ出し渋りか。実は倍は出せるんじゃないか？」

「無茶を言っな」

「じゃあ、豚箱で臭い飯でも食ってろ。じゃあな」

「わかった、15万。これが限界だ」

「嘘をつけ。20万出せるだろ？」

結局17万で手を打った。この男鼻持ちならない。

「いいビジネスだったぜ。で、名前は？」

ラーズは背もたれを前にして座ると、にやけ面で私をねめまわす。まるで身体に舌を這わせるようないやらしさだ。

私は極力表情を変えまいと、キツとラーズを見据える。

「ヨミ」

「嘘だ」

「じゃあ聞くな」

私ははねつけた。

エルフの世界ではトーテム信仰が強いが、同時に言霊も深く信仰している。

言葉には力がある。これは間違いない。

故に真の名前を知るものは、その名前を持つものの心を手に取るように操ることが出来ると信じられている。これが言霊信仰だ。

「私がエルフだって知ってるだろ？」

「だからどうした。性奴隷ごときが神である俺様に口答えするのによ？」

「なっ！ 誰が性奴隷だっ！？」

「だから、お前。每晚俺様に奉仕しろ。それがせめての償いと思え」「っざけるな！」

議論は平行線。

だが収穫はあった。翌日、証拠不十分で不起訴処分になり私は留置所とおさらばした。

いや、そのつもりだった。

2

「はあ、ラーズお前って奴はよ」

筋骨たくましい黒光りする肌を持つ男は小さくため息をついた。

その男の目の前には不機嫌そうな表情を隠さない、目つきの悪い女エルフがアグラを搔いていた。

おそらくそれなりめかしこめば美人に見えるだろうが、あいにく狼のような殺気とみずばらしいローブが美しさを台無しにしている。

「ああ、紹介が遅れたな。こいつが下僕3号のヨミだ」

ラーズはいけしゃあしゃあとそらんじる。

下僕3号と紹介された女エルフはとがった耳をぴくりと立てる。不満らしい。

「それでこいつが下僕1号のボイドだ、下僕3号よ」

「だからその自己紹介、自己紹介になってないから」

「黙れ肉だるま」

ボイドの抗議はあつさり却下された。

ラーズとボイドはハイスクール時代からの中だが、10年近くたった今も会話の内容に進歩は見られない。

と、ヨミがあからさまに迷惑そうな顔でボイドを睨みつけると、口を真一文字に引き結ぶ。

「ふん、ドワーフか。こんなむさくらしい生き物の傍で呼吸は出来る。ガス中毒する」

「じゃあ死んだら？」

ボイドは投げやりに答える。

まったく会話になっていない。取り付く島もない。あてもない。

「で、ラーズよ、遺跡探索の頭数そろえるためとはいえ、こんな質の低い奴らを集めてどうするんや？ この前拾ったサルといい、チームの結束なんて言葉は微塵も似合わないぜ、俺たち」

「だから無能の烙印を押されるのだ、下僕1号よ。この天才にかかれば、一個師団に匹敵する精鋭部隊に変貌するのだ！」

「……根拠なし」

ボイドはこの日何度目かのため息をついた。

ため息をつくたびに幸せが遠のくと誰かが言ったが、そろそろテラ

の裏側から幸せが一周してこないかなと儚い希望を託す今日この頃である。

「ところでサルとはなんだ？」

ヨミがラーズに尋ねる。なり行きで遺跡探索に参加することになってしまったが、隙あらばこいつらを出し抜かなければならない。そのためには敵を知る必要がある。

「あつ？　サルはサルに決まってるだろ。それ以上でもそれ以下でもない」

「いや、れっきとした人間なんですけど」

「あん？　今サル語が聞こえた気がするな」

「いや、その、サル語ってなんすか？」

小さい抗議をあげたのは金髪を逆立てたグラサンの暑苦しい男。一昔前のヒーローのように見えなくもない。3枚目ということを除けば。

「誰だこのサルは？」

と、ヨミ。

「だからサルだって」

と、ラーズ。

「あ、餌は与えたらあかんで。まれに噛み付く恐れがあるからなこれはボイド。」

「うつきいゝ！　俺はサルじゃねゝ！」

「あ、すまん。ゴリラの間違いか」

「あのなあ」

そのサルは生意気にもレオニード・アルモドバルと名乗った。まるで人間のように。

「いや、だから人間だってば」

お後がよろしいようで。

ラーズ一行は目的の遺跡を目指して行軍を続けていた。

正確には4人乗りのミニバンを駆つてのドライブといったところだが。

「それにしても、公僕風情が休日には遺跡荒らしだと？ 結構なご趣味をお持ちだな」

ヨミはフンと鼻を鳴らす。

艶やかな瑠璃色の黒髪が窓から差し込む風でふわっと浮き上がった。そのヨミはというと、ぼろぼろのローブは脱ぎ捨て、今はエルフの民族衣装の面影を残す人間のファッションに身を包んでいた。エスニックな中にも今時のギャルが好みそうなPOPなアクセントが利いている。改めてみると、自分の目に狂いはなかったとラーズは確信した。

この女、いつか俺のモノにしてやるぜ。

「ん？ いやらしい目で私を見るな、下衆」

「馬鹿もん！ こんないい男を捕まえて卑猥な視線だと？ 視姦だと！？（そこまで言つてない）はあ、キミは何か勘違いしている」

「そうか？ めっちゃあつてと思うんやが……」

ボイドがボソリ。

「ええいつ、必殺美形びいびいむうううっ！」

「死ね、光速より早く」

そっけなくヨミ。

こんなやり取りが小一時間続いた。

そして現場に到着。

「で、何でパレルモ遺跡なんかに来たんだ。本題をそらし続けやがって」

ヨミはラーズに尋ねる。

そう、何故この遺跡に行くのか話を振ると、ラーズは巧妙にかわし続けていた。

だが、このままでは納得できないし、協力する気にはなれない。いくら弱みを握られていてもだ。

「理由？ 知りたいか？」

「ああ」

「じゃあ、一発やら……」

バキッ

ラーズは地面を這った。

「もう一度尋ねる。何故パレルモ遺跡に来た？」

「それはドラグーンがあるからでございます、女王様」

「ドラグーン？」

嫌な響きだ。ヨミは唇を噛み締めた。

あの日あの時、帝国は私の故郷を焼き払おうとした。

そして私が取った行動で故郷は……

ヨミは力なくかぶり振ると思いを打ち切った。

考えても仕方ない。過ぎた過ちを悔いても進展はないからだ。

「どうした、ヨミ？」

「いやなんでもない」

「嘘だな」

「なんでもないと言っている！」

「ムキになるところがことさら怪しい。そうか分かったぞ」

ヨミはドキつとした。

いや待て、奴ははったりをかけてこちらを揺さぶろうとしているに過ぎない。平静を保て。ここで計画をばらすわけにはいかない。

ヨミは出来る限り取り澄ましたが、

「あの日だろ？」

この一言でこけた。

「だっ、だあああれが生理痛と言った！？（そこまで言っていない）」

「おや、まだおめでたじゃないのか？ いや、陣痛かなと思ったんだが（そこまでいってない）」

これはボイド。かなりエグイことを言う。やはり根に持っているらしい。

「なんだ〜、可愛いところもあるなあって思ったのによ〜」

不満げなラース。

冗談じゃない。そこらのぶりっ子ぶったガキどもと同列にするな！
「それにしても、そんな物騒なものがこの古ぼけた遺跡に？ ドラ
グーンは近代文明の賜物だろ。古代文明と何の関係がある？」

ヨミが言うのはもつともだ。

ドラグーンは広義の意味では自走式装置なので、魔動自転車から始
まりバイク、魔動モーターボート、果ては飛空艇までを含む。だが、
日常的にこれらをドラグーンと呼ぶことはない。むしろドラグーン
とは軍事業界でいうところの戦闘機、戦車、戦艦を指すことが多い。
いずれにしろ、これらの産物はマギが発見された200年前からの
技術の産物であり、数千年前の古代文明であるパレルモ遺跡はおお
よそ無縁だ。しかし――

「ドラグーンの語源はドラゴンだってことは知ってるな？」

「ああ」

ドラゴン。それは創世神話に登場する伝説の怪物。地球最強の生命
体である。

もちろん現在は存在しない。

だが、いまテラをかけめぐるレイラインは「龍の息吹」と言われ、
ドラゴンの血流が起源とされているのだ。これが火山活動を引き起
こし、テラの大気を作り出し、雨を降らし、海を造り、大地に緑の
恵みをもたらしている。そう、ドラゴンはテラそのものとさえいえ
る。

そのレイラインを利用したドラグーンは、ドラゴンの出来損ないと
もいえるだろう。

「ここにドラグーンの元祖であるドラゴンの秘密が眠っているとい
う噂があるんだよ」

「まさか。ドラグーンを運用した形跡など、古代の文献からは見つ
かっていないんだろう？」

「ところがだ。ドラゴン研究の第一人者であるドンガ博士によると、

民謡や神話を紐解くと、この時代からドラグーンを運用していた形跡があるらしいんだ。例えば紀元前3500年前。ラウル川のデルタ地域を支配したジユダ文明においては――」

「馬鹿馬鹿しい……」

と言いつつもヨミは素早く思考をめぐらした。

果たしてそう言い切れるのか？

何故ならマギとは無縁のエルフの世界においても、ドラグーンに似たような原理で動くカラクリが存在するからだ。エルフの間ではアツシモと呼ばれるカラクリで、主に儀式のために使う人形だ。

「とにかく龍の道を追求するワイにとっちゃ、ドラグーンはともかく、古代文明で龍の謎に少しでも近づけられるのは有意義なことや」
ボイドは実直そうに頷く。

ドワーフは人間の信じる神の他に、龍を信仰しているとある文献で知った。

最強の生命体を研究し、自らを龍に近づけることが道とされているのだ。

「そうそう、これはイイネタになるぜ。何か発見できれば、一面を飾れる」

レオが手帳とペンを片手に言葉を弾ませる。が、

「あれ、なんでサルがいるんだ？」

「ちゃんと山へ戻れよ」

「バナナはないぞ」

あつさり存在がサル以下に格下げされる。

「おひ」

レオの抗議もむなしく、3人は早速遺跡に向けて歩き始めていた。

4

「何もないな」

ボイドが肩を落としてぼやく。

ここはパレルモ遺跡の最下層部と呼べる場所。

途中、遺跡に住み着いたモンスターと何度か遭遇したが、ラーズとボイドの目にも止まらぬ電光石火のコンビネーションであっさり撃退してしまった。

ヨミは軽い驚きを覚える。

これは戦闘能力に関しては上方修正する必要があるそうだな……

一方のレオはというと、石碑に刻まれた古代神聖文字と悪戦苦闘していた。

「おい、少しは役に立てよなサル。貴様の語学力を頼りに、大金をはたいて雇ったんだ」

ラーズは耳クソをほじくりかえすと、ふっと息で払った。

「分かってるって」

「ほう、サルであることをようやく認めたか」

「いや、そこは承諾してないんだけどね……」

レオはげんなりすると解読作業に戻った。

「で、何て書かれてるんや？」

ボイドは象形文字を難しそうな顔で見つめる。

「どうやらここは何かの工場らしいぞ。太陽の船だかなんだかを作っていたらしい。世界を股かけるとか書いてある」

「船？ 数千年前なのに外洋に出る造船技術や航海技術があるとは思えないがな」

ヨミの指摘にラーズが軽い驚きを覚える。

「本当に物知りだな、お前。エルフは世間知らずな井の中の蛙だと思っていたけど、どうやらお前は違うようだ」

ラーズはヨミを見つめなおす。

「何者だ？ 何で図書館でわざわざ騒動を起こした？」

「聞いても無駄だ。図書館の騒動はただむしゃくしゃしていただけだ」

「あつ、そう。そういうことにしておくわ」

ラーズはあっさり引き下がる。ヨミは注意深くラーズを観察した。

似ている。が、まだ確信は持てない。そもそも、奴がデタラメをいつている可能性も充分考えられるからだ。

「で、太陽の船はどこにあるんや？」

ボイドがレオに尋ねるより早く、

「おりゃ」

ラーズの右手から衝撃波が生み出され壁を吹き飛ばす。

遺跡内でむちゃくちゃだ。最悪崩落の危機も！

だが、ヨミのショックはそれだけではなかった。

（集中時間もなにもなかった。こんなに強力な魔法を意図も簡単に！ まさか……）

散らばったジグゾーパズルがいくつか組み合わさった気がする。

「おい、ラーズ！ 下手すりゃ俺たち生き埋めだぞ！」

「下手をすればだろ？ 俺様は天才だ、抜かりはない。見ろ」

ラーズの指差す方向を注視すると、崩れた壁の向こう側に地下に続く階段が見えた。

「ビンゴだ」

「ぜってーテキトーだよ、コレ」

レオが嘆息してがつくり肩を落とした。

一行は注意して階段を下りる。

魔導灯のManaの残量が気になるところだったが、まだしばらくは持つ。

「最悪、夜目の効くボイドとヨミに誘導してもらっさ」

ラーズは気楽なものだが、

「馬鹿め。それは月明かりなど少しでも光がある場合だ。完全な闇で見えるか間抜け」

ヨミがグサリと釘を刺す。

「おい、言い争いはそこまでにした方がええぞ」

ボイドの声に緊張が走る。

ラーズは会話を打ち切ると懐のソードブレイカーに手を伸ばした。

この武器はジャスティン神に仕える警察機構の人間（正確にはドワーフにも）だけに支給される特殊な武器だ。その主眼は相手の武器を絡めとり、破壊することである。そのため刀身の背の部分が鉤状になっているのだ。もちろん剣としての機能も申し分ない。

見ると小型のブリキがヨチヨチとこちらに向かって歩いてきているのではないか！

「まるでアツシモだ」

ヨミが苦々しげにブリキを見つめる。

「おそらくこの遺跡を守る防御システムやろう。まだ現役ってことか」

ボイドは嬉しそうにウォーハンマーを構えた。

ボイドの信仰する神はダイソン神。大地と守護を司る神で、土木建築業者の他、消防や軍の人間にも厚く信仰されている。この神の信者は純粹に武器として開発された剣などは好まず、槌や斧などの実用品を改造した武器を使う。あくまで護身用の範疇というわけだ。まあ、槌や斧で殴られればただじゃすまないが……

「さうて、おもちゃの行進にヤキいれたるか」

ボイドが突進した。ずんぐりとした身体に似合わない猛スピード。肥満のように見えるその身体は、実は筋肉の固まりだ。

「りゃあああ！」

ボイドがウォーハンマーを一閃させると、その軌道上に存在した全てのアツシモが吹き飛ばされる。

「なんだ、手応えないな」

「油断するな、黒豚。優位を楽しむ暇はないぞ」

「あん？」

ヨミの叱責にボイドはカチンときたが、ビュン

ボイドの頬を掠めて一条の矢が飛びすさる。

見ればヨミが片手に固定できるショートボウを構えているではないか！

「てめえ……」

俺を狙ったのか！？

いや、違った。

一足遅れて背後でがしゃんと金属の砕ける音がする。今しがたボイドに飛び掛ろうとしたアツシモの胸部に深々と矢が刺さっていた。

「言っただろう、優位を楽しむ暇はないと。貴様、乱戦でも一対一のルールが通用すると思っているのか？ まったく、素人もいいところだな」

「くっ」

確かに街のケンカで集団戦になった時、一対一では通用する戦術がまるで通用しないことは経験している。例えばタイマンの勝負なら、サブミッション（関節技）が決まれば、ほぼ戦いの趨勢は決まったも同然だ。相手は逃げられない。やらっればなしだ。ところが集団戦では、一人に関節技を仕掛けたところで、まだ自由な敵が複数いることになる。よって、格好の的になってしまふのだ。

「確かにお前の言うとおりだよ！」

ボイドは振り向きざまにウォーハンマーを一閃、背後から迫るアツシモを粉微塵に吹き飛ばした。

「しかし、確かに歯ごたえはないな」

ヨミがぼそり。

一方、

「オラオラ！ 無敵に素敵なラーズ様々の哀れな犠牲者になりたい奴はどいつだ！」

ラーズはこれまた無謀な突撃を試みている。が、無茶苦茶の様に見える、その攻撃に無駄はない。

剣を切る。その勢いで体当たりをかます。足払いをかける。崩れたところに左手に構えたスモールシールドを叩きつける。まるで流れる小川のように一連の動きが連動する。

「確かに単純な腕力なら俺の方が上や。けどな、戦いのセンスは悔しいが奴のほうが上や」

ボイドは僅かに息を切らしながらも、楽しげに語ってみせる。

「まったく大したもんだよ、あいつは」

「そうか」

ヨミは複雑だった。

奴がホンモノだとして、どうする？

どうやってあの巨大な敵に立ち向かわせる？

確かにかなりの腕前だ。並の戦士が束になってかかっても遅れは取らないだろう。だが、それまでだ。

あの絶対的な神にも等しい力を持つあいつと、互角以上の勝負が出来るとは現段階では思えない。

何より、

（奴の血の色がな……）

赤色なのだ。

と、じろじろラーズの傷口を見つめているヨミの視線に気付いたらズガにんまりする。

「どうした？ ホレたか？」

「死ね」

「照れちゃって、かわいい」

「なっ」

ムキになるヨミを無視してラーズは目の前のアッシモ叩き伏せた。
完勝。

僅か5分強の戦闘だった。

THE WARS OF ROSES (後書き)

いやゝ、始まっちゃいましたよ「THE WARS OF ROSES」

本編を題材にわたしのHPにおいて自作曲も公開しております。興味があつたらぜひ聞いてみてくださいね！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9030b/>

グレムスリンガー

2010年10月14日14時43分発行